

游美

- 1 舟生 太一さんの作品と
作品についての言葉
- 2-3 美術鑑賞旅行
- 4 作家探訪 仲 裕行先生
- 5 新春特別講演会
会員のためのギャラリートーク
- 6 デッサン講習会
友の会からのお知らせ
あとがき



舟生 太一 《刻》

2024年／油彩・カンヴァス／F100／第11回日展入選作品

福島県いわき市にある港近くの公園に数本の樹木が植えられています。この絵の木は、そのうちの一本です。

今から14年前に東日本大震災が起きました。いわき市以北はとても大きな被害を受けました。私は、身近にある山や海などの風景が好きで描いてきましたが、震災後しばらくはいわき市の海岸に行くことができませんでした。徐々に近くの手へ行くようになり、そんな時、震災前に行ったことがあるいわき市の海岸や港に行きました。津波で船が流され

港や近くの建物が破壊されたことは聞いていましたので、きっとひどい状態だろうと不安な思いで向かいました。目にしたのは、基礎だけの建物や崩れかかった岸壁でしたが、樹木はそこにしっかりと生きていました。その樹木の姿がとても心に残りました。

その後、港には大きな船が行き来し、公園は整備されて樹木を取り巻く景色は大きく変わっていきました。樹木がその場所で、変わらず生きていく姿を絵にできたらいいなと思って描いています。

(北茨城市在住)

2025年2月10日～17日の8日間、31名の会員がポルトガルを訪ねました。スペインのサンティアゴ・デ・コンポステラからポルトガルに入り、ポルト、コインブラ、バターリャ、アルコバサ、シントラ、ロカ岬、リスボン等の世界遺産と美術館を楽しみました。

ポルトガルの美を訪ねて

小川 正一



コロナ禍の2020年に一度は夢見た「ポルトガルへの美術鑑賞旅行」へ参加することができました。日本にも関係があり、大航海時代に繁栄したポルトガルでは、どんな風景に出会えるだろうかと胸を躍らせながら、成田からマドリードを経

由してポルトへ向かいました。

世界遺産ポルト歴史地区の世界で最も美しい書店のひとつの「リヴラリア・レロ」の店内中央にある螺旋階段は、ハリーポッター的一幕の中にあるのではないかと感じさせるレトロな雰囲気でした。「サン・フランシスコ教会」は、海洋帝国ポルトガルを感じさせる建物でした。内部装飾の天井、壁、柱は、つる草、鳥、天使など金箔を張った彫刻で、目を見張るものばかりでした。主祭壇の左に「ジェッセの樹」と呼ばれる



サン・フランシスコ教会 ジェッセの樹

るキリストの系図、右手前にモロッコと長崎(1597年)の殉教者の祭壇があり、日本とのつながりを知ることができました。

ポルトからリスボンまでの道のりの車窓からは、温暖な地中海性気候に育まれたユーカリや松、オリーブやぶどう畑が広がり、身も心もリフ



サン・フランシスコ教会 ポルト



2025/2/13 バターリャ修道院にて

レッシュすることができました。中西部の小さな街バターリャに立ち寄り、世界遺産「バターリャ修道院」を見学しました。修道院は、「アルジュバロータの戦い」でスペインを破ったジョアン1世の、奇跡的勝利を記念し建てられました。院内には、ジョアン1世とその子のエンリケ航海王子の墓があります。1386年から2世紀かけて建設されたので、マヌエル様式のゴシック建築に加え、ルネサンス建築が融合した建物です。教会の奥には、「未完の礼拝堂」があります。ポルトガル王マヌエル1世に由来するマヌエル様式の傑作の建物で、航海にまつわる天球、ロープ、鎖などのポルトガル独特の繊細な彫刻に感心しました。



バターリャ修道院 未完の礼拝堂

食事では、大航海時代の保存食であり、現在も人気食材のバカリャウ(塩漬け干し鰯)には、たくさんの料理があり、日本では味わえないものを食べることができました。また、日本の「金平糖」のもとのコンフェイトは、素朴で味わい深い伝統菓子でした。お土産にも好評でした。

今回の旅行は、海洋帝国時代に発展したポルトガルの独特の文化と日本との関わりの深さを感じることができました。また、友の会の方々と過ごす時間は、私の視野を広げ、楽しい旅となりました。

(水戸市在住)

名画と旅を楽しむ

郡司 照子



「それでは、この美術館で一番素晴らしい絵画の所にご案内しましょう」。美術鑑賞旅行最後の訪問場所、リスボンの国立古美術館。3階から絵画、屏風、陶器などを鑑賞した後、1階に降りたときのガイドさんの言葉だった。

名画が展示されている部屋を次々と駆け足で過ぎて次へ。行けども行けども部屋が続く。やっとたどり着いた一番奥の部屋にその絵は飾られていた。

15世紀から16世紀、フランドル地方で活躍した画家ヒエロニムス・ボスの三連祭壇画《聖アントニウスの誘惑》。なんて奇想天外。これでもかというほど奇妙で理解不能の生き物たちがちりばめられている。主役の聖アントニウスより、一つ一つの造形物の形や様子が目に奪われてしまう。着飾った婦人かと思ったら、ピンクの服の裾がサソリのようにとがった化け物。壺に足が生えている。イノシシのような顔をした男。頭に直接足がある生き物。赤いマントを羽織った魚等々、魔物の数々。丁寧に描き込まれた細部。中央の塔には旧約聖書のエピソードまで刻まれている。両翼の裏面にまわってみると、モノクロームの落ち着いた色合いで宗教画が描かれた外扉がある。外扉が開かれたとたん、内側の絵との違いにぎょっとする。ボスの想像力に圧倒された。



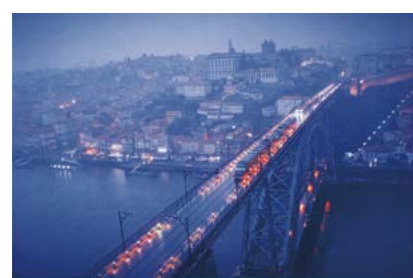
2025/2/15 国立古美術館にて リスボン

3つの美術館、7つの世界遺産、それぞれがとても素晴らしかった。また、旅情を感じさせる街並みや美しい自然にも心がときめいた。私の一押しは、雨のポルトの夕暮れだ。高台に建つセーラ・ド・ピラル修道院はライトアップされ、ぼんやりとした光に包まれて幻想的だ。修道院前のヴィラ・ノヴァ・ガイア展望台からドウロ川の北岸を見る。川

辺の家々の明かりや、ドン・ルイス1世橋のライトが雨に煙り煌めく様子は、今、実際に見ている実感がなく、映像を眺めているようだった。雨と風が強く打ち付ける中、思わずカメラを出し、シャッターを切った。

そして、なんといっても食事がおいしかった。魚が中心で量も十分。甘いデザートが必ず付いて、食いしん坊の私は食事の時間が楽しみだった。もちろん食卓の楽しい会話で心がふわっと温まり、美味しさが格別になったのはいうまでもない。

こんなすてきな旅を企画して下さった皆様、仲間に入れて下さった皆様に感謝しつつ、旅の記録を綴り、思い出に浸っている。
(水戸市在住)



2025/2/11 ヴィラ・ノヴァ・ガイア展望台からドン・ルイス1世橋とドウロ川北岸の霞むポルト市内を眺める



ヒエロニムス・ボス《聖アントニウスの誘惑》/1501年頃/油彩、板(オーク材)
131.5×119(中央パネル)、131.5×53(両翼)cm/©Photo:Lúisa Oliveira/MMP/ADF
国立古美術館蔵 リスボン

日本画家

仲 裕行先生を訪ねて

自分の世界を広げ描く —調べ尽くして—

「描くことは、自分をさらけ出すこと、見つめることに気づいた。自分とは何者かと考えた時、父や先祖に思いが至り、日本の古代に思いを馳せた。今作は、荒波に翻弄されながら日本へ帰還する遣唐使船と、それを見守る仏たちを日輪の中に描いている。先進の文物や技術・宗教をとり入れるため、命懸けで海を往来した先人への尊敬と感謝の想いで描いた。…」《日出る国へ》2022年 再興第107回院展において奨励賞 天心記念茨城賞を受賞した作品に寄せた作者の言葉である。

この壮大なロマンに満ちた作品はどのようにして生みだされてきたのだろうか。

日本画との出会い

絵という空想の世界で遊ぶのが好きだった子供の頃、広告の裏などに暇があれば絵を描いていたという。

高校時代、美術の授業で出会った日本画に惹かれた。「なんて綺麗な宝石のような絵具。こんな絵具で絵を描いていきたい」と思った。そんな中、日本画家 福井爽人氏の作品に出会う。この先生に学びたいと調べ、東京藝術大学の先生であることが分かる。努力の末、憧れの福井先生のいる大学に入学を果たす。

スケッチ旅行等、多くの時間を共に過ごし指導を受けた福井爽人氏からは、絵とは何か、ものを本当に見る、本質を描くとはどういうことか

といった自分の絵の土台となっている大切なことを多く学んだ。大学院の時、院展に初入選。以後、福井氏の師である平山郁夫氏に師事、大きな影

響を受ける。平山氏は絵描きの枠にとどまらないスケールの大きさを持っている人だった。先生からは、「いい絵を描くにはアトリエの外に出て絵以外のことを学び、自分の器を大きくしろ」と教えられた。平山先生ご自身も絵を描くことにとどまらず、世界の遺跡の保存修復、大学の経営、後輩の指導と幅広く活躍されていた。

作品制作にあたって

大学院での平山研究室では、敦煌莫高窟の壁画模写に取り組んだ。そこで出会った現地の人々の温かい素朴さに魅了され、その後、中国ミャオ族等の少数民族を描き始める。いろいろな手がかりをもとに情報を得、運転手、ガイドと3人で現地に行く。スケッチの様子を村中の人々が取り囲んで見物するといったこともあった。また、日本との文化交流ということで、画商と共にブータンへも出かけた。ロイヤルファミリーの一室を借りての茶会に参加。4000mもの高地に出向き、現地の人々を描いた。

1999年、花の絵を依頼され、増上寺大広間の天井絵を描く。上村松篁・小倉遊亀らが名を連ねる200人中で一番の若手だった。2024年開催の常陽藝文展に出品した龍。初めての水墨画に挑戦し、思う



《雲龍図》
2024年／水墨画／182.0×182.0cm
幾星霜の想いを描く 仲裕行展



《銀舞祭》(中国清江苗族姊妹飯節)
1995年／紙本彩色／174.0×219.0cm
第80回院展／郷さくら美術館蔵

色を出すために試行錯誤の末仕上げた作品だ。先生がすべての作品において手を抜かないことは、描こうとするものについて納得するまで徹底的に調べ尽くすことにある。そのうえで、自分の表現に工夫を重ね作品にしていく。作品を完成させるまでに時間はかかるが、納得いくものを絵にしていきたいと。その情熱と行動力には驚かされる。10年ほど前から、自分の想いが伝わっているかと観る人の視線を意識するようになった。このことは、自分の作品をもう一步深めるきっかけになったとおっしゃる。

今後は

民話などからのイメージを膨らませて、茨城でしか描けないもの、今しか描けないものも描きたい。自分もどんな絵が描けるかわくわくしていると。少数民族を訪ねた際に手に入れた沢山の民族衣装の展示も計画されているとか。今後どのような世界を繰り広げ、豊かな作品を生み出していかれるのか増々楽しみである。



《夢多き時》
2001年／紙本彩色／72.7×60.6cm
小林俊秋氏蔵



《日出る国へ》2022年／紙本彩色
225.0×180.0cm／再興第107回院展奨励賞
第28回天心記念茨城賞受賞

なか ひろゆき
仲 裕行

1960 東京都に生まれる
1987 東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業
1988 再興第73回院展初入選(以後毎年出品) 平山郁夫に師事
1991 春の院展初入選(以後毎年出品) 日本美術院 院友推挙
1994 友芽の会 日本更生保護協会会長賞(翌年法務大臣賞)
1999 増上寺天井絵制作(浄土宗大本山増上寺拝殿大広間／東京都)

2001 法務省月刊誌「刑政」扉絵連載
2002 龍ヶ崎市郷土作家 仲裕行展(龍ヶ崎市歴史民俗資料館)
2006 第41回茨城県芸術祭美術展覧会特賞(2015年木村武山賞)
2022 再興第107回院展にて奨励賞 天心記念茨城賞
現在 日本美術院特待、茨城県美術展覧会委員、茨城美術会常任委員
龍ヶ崎市在住

仲 裕行
NAKA HIROYUKI

尾崎正明前館長 『茨城県近代美術館の思い出』

2014年から10年間茨城県近代美術館の館長を務め昨年退官された尾崎氏の、今だから語れる、今こそ語っておきたい「想い」を聴くことが出来た。

はじめに、茨城県近代美術館の在り方についての想い。美術館とはコレクションを集め、広げ、レベルを上げ、少しずつ成長していくのが本来の姿。美術館を訪れたなら企画展だけでなく、そこのコレクションを鑑賞すべきである。近代作家の作品収集において、当美術館は日本の先駆的存在であった。開館当初コレクションは充実していたが、その後は資金面の難しさが続き、作品の寄贈に頼らざるを得なかった。学芸員はコレクションの収集も重要な仕事である。当館の優秀な学芸員たちは、近年その仕事のスキルを磨く機会になかなか恵まれなかったのが心残りであると語られた。

企画展においては必要資金は過去の入場料収入より予算化される。その中において、「唐招提寺御影堂障壁

画展」(2017年)はさまざまなトラブルを乗り越えて実現し、展示の工夫も話題となり多くの鑑賞者が来館した。また、「速水御舟展」(2023年)も尾崎氏の強い想いで実施された久しぶりの大回顧展となった。それらの企画展を無理を承知で実施に踏み切り、開催を実現可能にしたのは、資金面で企業パートナーシップの援助があったからだ。

尾崎氏は在任中のさまざまなエピソードを話され、最後に友の会が企業パートナーシップの一員として美術館を応援し続けていることを感謝された。



2025/2/8 尾崎正明前館長の新春特別講演会会場風景

会員のためのギャラリートーク

2025年3月11日

「キース・ヘリング展」 アートをストリートへ 学芸員によるギャラリートークに参加して

鐘撞 眞由美

『キース・ヘリング』名前を聞いただけではわからない方も彼の絵を見たら「知っている!」「見たことある!」と仰る方が多いのではないのでしょうか。シンプルなラインで明るくポップでインパクト大の彼の作品。

3月11日(火)に「学芸員によるギャラリートーク」



2025/3/11 《キース・ヘリング展アートにストリートへ》
ギャラリートーク参加会員(後列左から5人目 講師の乾健一学芸員)
(筆者は後列右から4人目)

があり参加させて頂きました。講師は茨城県近代美術館学芸員の乾健一氏です。素敵なキースのTシャツで解説をして下さいました。地下鉄のドローイングから脚光を浴び始めた事、そのサブウェイ・ドローイングをしている写真があり、それは日本人の村田真氏(当時びあ在籍)が撮った写真である事、親子ほど年の離れたアンディ・ウォーホルと交流があったり共同制作を取り組むまでになった事、マウスの作品にはお二人のサインがある事、日本最良であった事等々たくさんの興味ある解説をして下さいました。《無知は恐怖 沈黙は死》という作品はまるで日光東照宮の「三猿」のように人が並んでいます。キースは「三猿」に影響を受けたのかどうか疑問に思って質問しましたが、それは不明との事でした。どなたかその謎がわかる方がいらしたら教えてください。とても楽しい時間でした。ありがとう。

(日立市在住)

講習会に参加して

関 礼子

静物のデッサン講習会(3日間)に参加した。講座室には、布が敷かれたテーブルの上に年代物の靴や靴、珍しい楽器など個人で揃えるのが難しいようなモチーフが組まれており、初日からとてもワクワクした。対象をいくつか絞って描く人もいたが、わたしは、席から見えたまま全体を描く構図に決めた。はじめに、講師の伊藤先生から楕円の描き方のコツの説明があった。モチーフの中にタンバリンがあったからだ。教えていただいたとおり直角の十字線からタンバリンを描いてみると、人工物らしいきれいな楕円が描けた。しかし全体を描き進める中で、タンバリンと他のモチーフの距離感や、モチーフとテーブルの接点などの整合性をとっているうちに、折角きれいに描けたタンバリンの楕円がいびつになってしまった。そこで、先生のご指導をいただいて、靴の大きさや石膏像の高さなど構図全体に大幅な修正を加えてタンバリンの形を調整。この構図の

修正とタンバリンの悪戦苦闘は最終日まで続いた。結局未完成でタイムアップとなり、デッサンの難しさを改めて痛感した。今回タフな挑戦になったけれど、とても楽しい3日間だった。次回はもっと上手に描きたいと思っている。(東海村在住)



2025/1/25 講習会風景(講座室)

<友の会からのお知らせ>

- ・近代美術館長 荒屋鋪透氏の講演会を冬頃に美術館と共催の方向で計画しています。
- ・水戸市でアートスクールを主宰されている関徹氏を講師にお招きして、9月28日(日)、10月5日(日)、10月12日(日)の日程で絵画講座を予定しています。
- ・秋の美術鑑賞旅行は、九州の福岡・佐賀方面へ2泊3日で行う予定で、現在検討中です。

(企画委員会)

あとがき

- 探訪 仲 裕行先生のインタビューは、熱の入ったお話で気が付くと3時間にもなっていた。中国の少数民族 苗族の祭「姉妹飯節」は、夕暮れの河原で繰り広げられる。着飾った娘たちが輪になって踊るゆったりした動きで、衣装に取り付けられた銀の飾りがシャンシャンとなる。その美しい情景が目に見えるようだった。
- ポルトガルへの美術鑑賞旅行の飛行機は、成田から北回りでアラスカ、カナダ、グリーンランドの北極圏を経てイベリア半島に入った。15時間半の旅だった。ロシア上空を飛べる日はやってくるのだろうか。

○下記の方々から、本号で使用了た作品の著作権使用許可、掲載許可及び画像データの貸与をいただきました。厚くお礼申し上げます。

- ・国立古美術館 (Museu Nacional de Arte Antiga) 蔵 ヒエロニムス・ボス《聖アントニウスの誘惑》の高精細画像データを Tânia Olim 氏 (Assistente Técnica/Arquivo de Documentação Fotográfica / Museus e Monumentos de Portugal, E.P.E.) から無償貸与、画像データ取得に関するご教示を Marta Carvalho 氏 (Coleção de Pintura | Painting Collection, Serviço de Educação Education/MNAA-Museu Nacional de Arte Antiga) から賜りました。

- ・仲裕行先生の作品《銀舞祭》の画像データを、郷さくら美術館 滝口氏から有償で貸与していただきました。
- ・《日出ずる国へ》の画像データを、茨城県近代美術館 平間克司司査から無償で貸与していただきました。

茨城県近代美術館 友の会会報

游美 No.109

発行 2025(令和7)年7月
編集・発行 茨城県近代美術館友の会
〒310-0851
水戸市千波町東久保 666-1
TEL.029-243-5111
E-mail : f.momaibk@gmail.com
HP : https://fmoma.com/

印刷 株式会社 光和印刷